涂長望氏の訃報

田　辺　三　郎*

中国の中央気象局長涂長望氏は1962年6月9日，56歳をもって不幸にも長逝された．気象学報第32巻第3期（1962年9月）にこのことが報じられており，中国気象学会理事長趙九章氏が追悼文をのせて，涂局長の生前の業蹟をたたえているが，われわれ日本の気象技術者としては，日本に直接関係の深い中国の気象業務の最近の発展の指導者として，その長逝に対して深くお悔みを申したい．

ここで最近の中国の気象業務の発展の状況や，趙九章氏の追悼の辞をもとにして，涂氏の生前の業蹟の断片をしのんで見たい．

中国の気象業務は日本の気象業務にとって最も関係の深いものの一つであり，1949年に人民共和国体制になって，中国の気象放送が行なわれなくなったため，日本の

ＩＧＹ西太平洋地域連絡会議に出席された涂長望（前列左より２人目）趙九章（おなじく３人目）両氏

気象技術者，とりわけ中国の気象状況が直接明日の天気に影響する西日本にとっては大きな痛手であった．

1954年秋には和達前気象庁長官が中国を訪問されて，彼地の気象業務を視察されたが，その視察報告で，当時中国の気象技術や設備が世界一般の水準にあることを知らされた．そして1956年6月1日に中国の気象管制が解除されて，突然地上や高層の豊富な観測資料が毎日放送されるようになり，日本にとっては大きな喜びであった．観測地点は従来の中国本土の主要地域のほかに，チベットや新疆省などを含めた全地域にわたり，チベットのラッサ（標高3658m）やタ－リム盆地のホタン，天山北路

のウルムチなど，従来秘境といわれたところからラジオゾンデ観測通報が得られるようになり，解析や予報に寄与するところが大きく，チベット高原をめぐる大循環の解明には非常に役立った．そしてラジオゾンデ観測地点は，昨今では100地点を数えるほどである．中国におけるこの美事な観測網の展開は，一つには中国における国家計画に基づくとともに，IGYを契期として行なったものと見られ，これは涂局長によるところが非常に多いわけである．

趙氏の追悼文によると，涂長望氏はイギリス留学ののち1934年帰国し，前中央研究院気象研究所，清華大学，浙江大学，中央大学などの研究員または教授を歴任し，1949年中央気象局長となった．

気象研究所および大学在任中の研究の主なものは次のとおりである．

長期予報の研究の創始：中国の天気を全世界の大気環流との関係において研究し，1937年の気象研究所集刊に相次いで発表されているが，涂氏は特に中国の農業に影響の大きい旱ばつと洪水の問題に関心が深く，中国における長期予報の発展と確立は，その指導と支持に負うところが大きい由である．

中国の気団と前線面の研究；中国気候および高空気候の研究：中国気候の研究は涂氏の論著の多くの部分を占めており，1938年には Köppen の分類を用いて，新しい中国の気候区分を提案している．

終りに1957年2月25日～3月2日に東京においてIGY西太平洋地域連絡会議が開かれ，中国からは趙九章・涂長望氏など10名の参加者が来日し，3月9日には気象庁第一会議室で，趙・涂両氏の講演会があった．涂長望氏は中国における気象事業の現状，特に急速な発展の模様を話され，深い印象を残された．

* 気象庁予報課